審査結果の要旨（別紙2）

論文題目：　涅槃経経典群の研究
氏　　名：　鈴木隆泰

本論文は、歴史的ブッダ入滅後もブッダの恒常なる存在を説き、大乗仏教の成立に深い関わりを持つ「如来常住思想」と、その思想を背景にインドにおいて四ー五世紀ごろ成熟し、恒常なるブッダのはたらきによる衆生救済の可能性を説く「如来蔵・仏性思想」との相互関係の解明を目的とし、これら二つを主題とする代表的な四つの大乗経典、すなわち『涅槃経』『大雲経』『央掘魔羅経』『大法鼓経』を考察対象として、現存する複数の漢訳、チベット訳の丹念な読解、比較分析作業を通し、そこに展開される両思想の形成過程を解明したものである。

結論として本論文は、涅槃経第一類（前半部）→大雲経→涅槃経第二類（後半部）→央掘魔羅経→大法鼓経という順に、互いに密接な関係を保ちつつ経典が制作され、この一連の制作過程の中に、ブッダの存在をあくまで超越的な外在として捉えようとする如来常住思想と、その超越性を衆生の内に内在化させようとする如来蔵・仏性思想との緊張した遣り取りが反映していることを明かした。

本論文は、これまで涅槃経を除いては部分的な翻訳、紹介によって文献の概要しか与えられていなかった諸経典を取り上げ、複数の異本を用いてその全体を解読し、境界の曖昧であった如来常住思想と如来蔵思想との本質的相違を、四経典の経典形成史の中に据えて詳らかにした。ことにこれら四経典が各々に独立した作品でありながら、一方では「涅槃経経典群」という、より大きな一作品に比せられるべき経典群を構成し、その作品群の中では各経は閉じて独立した体系を作らず、相互に影響し合って制作や改編が可能なあり方をしたという興味深い結論を導き出している。この点は著者が取り上げた作品の特殊性を超えて、「大乗経典の作品としての独立性と相互依存性」という新たな問題提起をなしたものとして高く評価できる。

論文構成上に一部再考の要があるなど、改善の余地を残してはいるものの、本論文は、大乗経典研究において学界に寄与するところ多く、博士（文学）の学位を授けるに価するものと判断する。